

ほんばこ



12月しわす はるまちづき ごくげつ(師走 春待月 極月)

二十四節気

たいせつ大雪 7日 朝晩にうっすらと氷が張るのが見られます。北国や日本海側では本格的に雪が降り出します。

とうじ冬至 22日 1年で最も昼が短く、夜が長い頃のことです。これから日が伸びていくため、古代では冬至が1年の始まりでした。

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2023

12月に入り、今年も残すところあと1ヶ月となりました。この1年間、大変なことも楽しいことも、たくさんありましたね。年末はのんびり読書をして、1年間の疲れを癒してみたいかがでしようか。

図書委員からお薦めの本

『雪国』 川端康成 著 新潮文庫

先月の下旬頃から急に寒くなり、冬らしくなってきました。冬といえば雪！ということで、川端康成の『雪国』を薦めたいと思います。この本は、雪国を訪れた島村と雪国の温泉町で暮らす駒子が、互いに惹かれあう、言わば恋愛小説です。繊細な表現と美しい風景描写に、まるで自分が雪国にいるような感覚を味わうことができます。今年の冬は、皆さんもぜひ、『雪国』の世界を体験してみてください。

(2年 女子)

「子供の読書キャンペーン～きみに贈りたい1冊～」(文部科学省)

子供の読書活動を推進するために、「子供の学び応援サイト」に特設ページを設けています。この特設ページでは、著名人による子供たちへのおすすめの本とメッセージや読書関係団体の取り組みを紹介しています。右QRコードや公式ホームページ等からぜひ検索してみてください。



おすすめの本紹介者

	名前	職業	おすすめ本 著者
1	上白石 萌音	俳優・歌手	『本の運命』 井上ひさし 著
2	金城 梨紗子	TEAM JAPAN シンボルアスリート レスリング競技	『チーズはどこへ消えた?』 スペンサー・ジョンソン 著
3	小坂大魔王	芸人・プロデューサー	『14歳からの哲学入門「今」を生きるためのテキスト』 飲茶 著
4	高木 美帆	TEAM JAPAN シンボルアスリート スピードスケート競技	『筋肉のしくみ・はたらきゆると事典』 坂井建雄 監修
5	中江 有里	俳優・作家・歌手	『ようこそ、ヒュナム洞書店へ』 ファン・ボルム 著
6	野村 萬斎	狂言師	『中島敦全集 1—小説』 中島敦 著
7	益子 直美	公益財団法人日本スポーツ協会副会長・日本スポーツ少年団本部長	『君を見上げて』 山田太一 著
8	三宅 宏実	国際ウェイトリフティング連盟理事・ウェイトリフティング指導者	『夢をかなえるゾウ 1』 水野敬也 著

1 魯迅：1881～1936。中国の評論家、作家。本名は周樹人。中国浙江省生まれ、日本に留学、医師を志すが方向転換して文筆家となる。北京や上海に住み、中国の大激動のなかで、社会的問題意識を持って発言を続けた。「中国民衆よ、このままでいいのか？ 覚醒せよ！」と。魯迅は「近代中国文学の父」と呼ばれる。有名な作品に『小さなできごと』『故郷』『祝福』『藤野先生』『魏晋の気風および文章と葉および酒の関係』、散文集『野草』などなど。

2 『故郷』

1921年『新青年』に発表。当時中国は中華民国だが軍閥、西洋列強、日本などの勢力がひしめき混乱していた。日本は大正10年。魯迅の『故郷』は中学の国語の教科書に載っている。それは恐らく竹内好（たけうちよしみ）の訳だろうが、他にも佐藤春夫、井上紅梅、高橋和巳、駒田信二、藤井省三らの訳もある。アオゾラ文庫で佐藤春夫と井上紅梅の訳が読める。

語り手「私」（魯迅らしき人物）は幼い頃ルントーという幼なじみと遊んでいた。ルントーはスイカ畑の英雄だった。が、「私」は地主の子で外国に留学した。久しぶりに故郷の土を踏んだとき、ルントーは「私」に何と言ったか。ルントーはひざまづき「だんなさま・・・」と言ったのだ。友だちなのに英雄なのに。ひざまづいて「だんなさま・・・」とは・・・！

誰がルントーをそう変えてしまったのか？ 何がルントーを卑屈な奴隷根性の持ち主に変えたのか？

それは、中国社会の混乱と抑圧と貧困であるに違いない。同時に、奇妙な形でしみついた、中国二千年の（仮に儒教国教化以来と考えてざっと二千年。孔子以来なら二千五百年）の「吃人的礼教」（『狂人日記』）（人を食い物にし不幸にする儒教道徳）のせいであるに違いない。搾取されている方が、搾取している方に、深々とお辞儀をして「だんなさま・・・」と敬意を表する。支配された民が、支配者に対して、はいつくばって礼を尽くす。このような礼儀の教えは、儒教国教化以来？ 中国の民に染みついたものであり、みんなを不幸にしている。これを打破せねばならぬ。民衆自身が覚醒せねばならぬ。魯迅はそう考えたに違いない。『狂人日記』(1918)、『孔乙己』(1919)、『阿Q正伝』(1921)などはこの考えで中国民衆を鼓舞すべく書かれたに違いない。

なるほど、儒教は、上の者が下の者を抑圧し支配し搾取するのに便利な装置であったのか・・・だが、ここで大きな疑問が生じた。私（たち）は、孔子こそ東洋の大聖人であり、これほど偉い人はいない、と教えられてきた。儒教は値打ちのあるものだと言われてきた。では、どう考えればよろしいのか？ 孔子は単なる封建反動思想家で冠婚葬祭業者なのか、それとも大聖人なのか？ 儒教は民を抑圧する教えなのか、それとも何かしら尊い精神性や倫理を持った教えであり継承すべきものなのか？

みなさんは、どう考えますか？

この問題にひっかかり、大学でも少しは勉強した。今でもまだ勉強中だ。そこでとりあえず得た私なりの答は・・・

魯迅が見ていた孔子像や儒教は、恐らく明清以降の体制教学化した儒教におけるそれであって、もし本物の孔子が出現して見たなら、「私はそのようなことは教えておりません」と激怒するような代物であったに違いない。孔子は弱者へのいたわりに充ちた人で、伝説だが、苛政に苦しむ寡婦のためにもよき政治をすべきだと弟子に説いたと言う。孟子もそれを継承し「鰥寡孤独を大事にせよ」と王に迫った。イエスはどうか？ 実在のイエス像とは似ても似つかぬ像を後世の権力者（例えばローマ帝国）が勝手に作り出して語っている、ということもあるかもしれない。日本ではどうか。孔子が聞いたら激怒するような内容を、例えば後期水戸学や明治帝国主義以降の人々は、孔子の教えとして捏造して語ってきたのではなかったか？ 例えばこのような問いを持ち、では孔子やイエスの本当の教えはどうであったのか？ 後世の時代社会の中でどう利用され歪めて解釈されてきたのか？ では我々自身はどう見てどう考えてどう生きればよろしいか？ ここにも学問をする必要（理由）があるのである。